ーアダルト小説ー

バー・アンバー(4)

多谷　昇太

※お断わり：同小説(1)～(3)迄は「あおむしさん」の方に掲載させて頂いてましたが主催者からアダルト小説は宜しからずとの指摘を受け、今回以降はこちら「みなせ」の方に新掲載となりました。どうか引き続きご通読の程を宜しくお願い申し上げます。なお今一点、既掲載の拙作「自らを越えて」をこちらは逆にみなせからあおむしさんの方へとシフトさせてもらいました。要するに「アダルト小説」と「青春小説」の交換ということです。「自らを越えて」も今後はあおむしさんで引き続きお楽しみください。以上、お断わりまで。

数瞬間を置いてからミキはおしぼりを顔から離した。涙目のあとは隠せなかったがニッとばかりママに微笑んで見せる。

「あら、ママ、泣いてなんかいないわよ。こちらのお客さんがあんまり面白いことを云うんで、思わず笑い転げていただけよ」とこともなげに云い、今度は俺に「田村さん、ご免なさいね。お聞きの通り。うちのママの云うことは絶対なの。わたし行かなきゃならないけど、さっきのお約束必ず守ってくれるんでしょ？」と話を振る。俺は面食らいながらも何某かのミキの策謀を感じて「あ、ああ…も、もちろんだよ。忘れはしないさ。例のアレでしょ？」とかまをかけた。「そう、アレ。わたしをデートに誘ってくださるっていうお約束。日時と場所は…（ママに視線をやってから）あ、ママに聞かれちゃ嫌だから、田村さん、ちょっと来て」そう云ってカウンターから出たミキは俺の肩に手を掛けて奥の着替え室へと同行を誘った。「ミキ…」咎めようとするママに「うーん、いいじゃない。5分で済むわよ」と往なしそのまま俺の手を引いて奥へ行こうとする。「ちょっとお客さん、困りますよ。着替え室まで入られちゃ」と咎めるママに俺は「うーん、いいじゃない。ママ。そんな困るばかり連発しなくても」とミキを真似て往なしたがしかしさすがにママの対応が心配されたので「すぐ、すぐだよ、ママさん。何も変なことはしない（自信なかったが…）。日時を聞くだけさ」と云い足した。しかしママは顔をこわばらせて「お客さん、表で待ってるのはパパだけじゃないんですけどね。若い者（もん）も一人付いているんですよ」と脅す。ハッタリとは思えなかった。映画のヒー

ローでも何でもない俺のこと、少なからず気圧され萎縮したが、予想される脅迫と暴行をも素早く覚悟の内に呑み込んで「ああ、そう。若い者ね」と言い残しそのままミキと着替え室へと入って行った。唇を噛んだママが表へと飛び出すのが後ろ目に見えたが最早あとの祭りだ。なるようになるだろうさ。

「田村さん、手帳を出して」着替え室に入って内側から鍵を掛けたミキがいきなり俺に要求する。「手帳…？よし来た」ミキの意図は未だ知れなかったが俺は素早く手帳とペンを出すと筆記の体制を取った。ミキはハンガーに掛けたコートの内ポケットからカードケースを取り出すと素早くめくって身分証明書と保険証を俺に提示して見せた。合点した俺はそこに記載されている名前・住所、および会社名とその住所電話番号を一気に手帳に書きつける。今しも若い者が怒鳴り込んで来はしまいか気が焦るが間違いのないように正確に書き写し、さらに今一度確認し終えた。ドアの外から荒々しく迫りくるだろう足音はまだしない。それを危惧しながらも俺はミキの意図を確認する。

「ミキ、これは、この身分証の人は、君への身体の提供者だね？」

「当然、そうよ。わたし此処に来る前に路上でこの身分証を、無意識の内にポケットから探って確認してたの。（自分の身体を指差しながら）たぶんこの身体を持つ女性がとても気にしてるものなんじゃないかしら？」

「そうか…。しかしミキ、これはいったいどういうことなの？この、えーっと、ショ、ショウ…ダイエイ？（邵廼瑩）って読むのかな？この人物を俺に探れっていうことかい？」

「ええ、そう。だってこれしかわたしには方法がないのよ。あなたのお陰で今は自分を取り戻しているけど、（自分を指差して）いつまたこのミキに、あいつに与えられたパーソナリティに戻ってしまうかわからない。だから…」と早口で云って一旦ミキはドアの外に聞き耳を立てた。いや、というかアイツの気配…いや、意向を感じ取っているのだろう。

「だいじょうぶそうかい？アイツ」と訊いたあとで俺は「うーん、そうか…君の今の立場はよくわかるよ。い、いや、わかるような気がするよ。現世に肉体を持つ俺であってもね。まあとにかく、この人物の詮索は任せてくれ。次に君と会うまでには必ずつきとめておくから。それよりミキ、肝心なことだが、君がこの人物ショウ・ダイエイ（邵廼瑩）の身体に入るのは初め

てのことかい？それとも今まで何回も入っていて、いま同様にこの世に現れているのかな？この人物は名前からすれば間違いなく中国人だと思うけど…」と始めの慮りはともかく後半はミキ同様に早口で尋ねる。表のママやアイツ、若い者の動きがいかにも気に掛かるからだ。ミキは「ええ、それは…」と云いかけたが急に両手を頭に掛けて苦悶し始めた。「どうした？だ、だいじょうか？ミキ…」両肩に手を掛けて揺するのに「はい、はい、わかりました。云わないから…で、でも、もうちょっとだけ待って。はい、すぐに」とばかり俺にではなくアイツに答えているようだ。「ああ」と忌々しそうにため息を吐いて何かをふり払うように頭をひとつ振ってから「田村さん、ダメよ。先生が…い、いえ、アイツが、もう待てないって。それに今の質問にも、そしてこれ以上の質問にもわたし、もう答えられないわ」と言明し俺の両手を除けた。さらに「わたし着替えるから…」と云ってドレスの両紐に手を掛ける。「そ、そうか。じゃ俺は…」そう云って外に出ようとするのに「待って。まだここに居て」と止める。

【ミキを抱く田村のイメージ】

ミキはドレスの両紐を外すとうしろに手をまわして背中のジッパーをおろした。ハイヒールを脱ぎ捨てて裸足になる。左右の腕を抜きドレスを下におろして両脚を交互に抜いた。今や赤いショーツ一枚きりの姿だ。そのドレスをハンガーに掛けてからミキは俺の真ん前

に立った。一瞬挑発するように俺を見据えたあとで両手をショーツに掛け、そのままスルスルと両膝の上あたりまでおろす。白い肌にコントラストに生える黒い陰毛があまりにも刺激的だ。ミキは「田村さん、好きにして。少しの間だけでも」と俺を誘う。手帳を胸のポケットにしまいながらも俺はミキの眼を見つめその思いを、心を感じ取ろうとした。「わたしは寂しいのよ。悲しいのよ」というさきほどのミキの言葉が脳裡をよぎる。しかしそれとは裏腹に欲望する右の手が彼女の脇腹に触れ、そして股間へとおりて行った。左の手が乳房を這いそれを揉みまわす。そしてもはや止まらぬ俺の両の手はミキの全身を、その垂涎の身体と今のこの歓喜の瞬間を確認するが如く、独立した生き物のように激しく這いずりまわるのだった。その間ミキは両腕を伸ばして俺の肩に置き俺のするがままに身体を任せていた。その折りの視線がどんなものだったか俺には確認しようがない。地獄の悪鬼もかくやと思うがごとく彼女の身体(のみ)を楽しんでいたのだから。しかしこの時外からドアがノックされた。決して激しい音ではなかったが虚を突かれたように俺は一瞬でも硬直して両手の動きを止めた。そしてこの時始めて彼女の、ミキの眼をまともに見たのだ。するとそこには涙が滲んでいて、口を半開きにしたままで、まるで何かに堪えているような、恰も殉教者のような表情が浮かんでいたのだった。稲妻のように俺の心が彼女のそれと共有しあった。情欲の泥沼を抜けて胸の奥底から熱いものがこみ上げてくる。「ミキ！」と小声ながら一声叫ぶと俺は両の手をミキの背中にまわしてこれを固く抱きしめた。恰もふたつの身体がひとつになるがごとく、彼女における真実を余すところなく吸収するがごとくに俺は数秒間抱擁を続けた。それから身を引いて改めて彼女の顔に見入る。その頬には二筋の涙が流れていて悲しみの表情が、わかってくれた、わかり合えたとでも云うがごとくに喜びのそれへと変わっていた。俺はミキの両脇に手を入れてその肩を揺らしながら「ミキ、いいか。必ず君を救ってやるから。どんなことをしてでも必ずもう一度会って、君をあの世の暗い世界から、洞穴から引き出してあげるから。いいね、信じてくれるね？！」と自らの決心を伝えた。はい、はいと返事をするがごとくにミキが首を縦に揺らす。それを確認してから俺はミキのショーツを上まであげ「じゃ、服を着て。俺は表に返事をして時間をかせぐから」と云ってミキの身体をハンガーの方に向けさせ、その背中をやさしく押しやった。従順にミキが

服を着始めるのを見やったあとで俺はドアに寄り「すまない。もうすぐだ。もうあと2、3分だ。ミキはすぐに出て行く」と云って表の気配をうかがった。そこには誰がいるのだろう。さきほどのノック音から判断すればママか若い者が激高して今や遅しと待ち構えているようには思われない。果して外から返事があった。

「困りますよ、お客さん」また困りますだ、ママだ。

「そんな所で乳繰り合われちゃ。特別料金をいただきますよ」と来た。決して険呑ではない。なぜだろうと怪しみながらも取り敢えずホッとして「ああ、分かった、分かった。勘定書を用意しといてくれ。おたくのミキは最高だ。いくらでも応分の料金は払うよ」と半ばマジで、半ばまさかボッタ料金を取りはすまいなどと危ぶみながら答える。するとほくそ笑む感じを丸出しにしながら「本当ですか？それならざっと30万円ほどを考えているんですけどねえ」と来やがった。一瞬ギョッとしたがそれはうしろから着替え終わったミキが俺の肩を叩いたせいでもある。ミキはニッと笑ってから「うそ、うそ。大丈夫よ。わたしにまかせて」と請け合った。

（続く）

【待っていろ、ミキ。必ず君を救いに行くぞ！】